

中国青海チベット族の慣習法実践とその変化
——青海省貴南県C村の「トン」賠償の事例を中心に——

彭毛措（パクモツォ、金沢大学人間社会環境研究科）

中国青海チベット地域において、社会秩序の維持に法的な効力を発揮してきたチベット慣習法の実践と変化について考察する。20世紀に入ってから青海チベット地域では殺人や流血など重大事件は、中国の現行法とチベット族の慣習法両方によって解決する傾向が強く見られるようになってきたが、近年の青海チベット地域ではほとんどの紛争が警察や国家の介入を受けつつあるというのが現状である。グローバル化に伴って変化が見られるのは当然であるが、その社会的な背景や諸現象を考察すべき段階にある。

本発表では青海チベット海南藏族チベット自治州の遊牧地方を対象として着目し、主にフィールドワーク調査方法を通じて、さまざまな紛争や事件に直面した実例を取り扱い、オリジナリティーな資料を収集して分析することで、チベットの社会、文化、法律、宗教儀式などを把握し分析を行う。な主として、今日の中国青海チベット地域における慣習法のあり方、とりわけ「トン」という命価の賠償方式のあり方及び変貌について具体的な例を示したい。さらに、チベット仏教文化圏で生きている現代のチベット族の社会において、宗教指導者に依拠した紛争処理の状況、慣習法の位置付けやチベット族が警察や国家に紛争の処理を期待するようになっている背景を考察し発表する。

チャムド市マンカン県の言語事情

鈴木博之（京都大学）

本発表では、チベット自治区チャムド(Chab mdo)市マンカン(sMar khams)県に居住するチベット人が話す言語について、母語話者の考える言語区分を反映する社会言語学的用語と記述言語学的視点から見た言語分類の異同について明らかにする。マンカン県はその大部分がカムチベット語の分布域であるが、県西部の瀾滄江(Zla chu)流域ではラロン・マ(Larong sMar)語という非チベット系のチベット・ビルマ諸語に属する言語が話されている。マンカン県中央部のカムチベット語話者は、ラロン・マ語を smar skad（発音は sman skad）または logs skad と呼んで区別する。ただし、カムチベット語については地域名による名称の区別があることに加え、smyon skad または'dre skad（または'dres skad）と呼んで区別する言語が県南部のツァカロ(Tshwa kha lho)に存在するという意見が認められた。

現地調査および周辺諸方言の言語学的考察を通して、smyon skad または'dre(s) skad とされる言語は、'jang skad すなわちナシ語、しかもチベット人が話すナシ語を指すことが合理的に説明できる。一方で、県南端のメパ(sMad pa)村のカムチベット語を smyon skad と呼ぶ人もいるが、その通用性が低いことによる。その原因として、メパ村の言語は方言学的に見ると隣接する雲南省の方言と同一区画になり、マンカン県の中央部で用いられる方言とは異なる点にあることが判明した。また、方言区分を詳しく跡づけていくと、マンカン県の過去の行政区画とよく対応することが認められた。

近代日本仏教界とチベットとの関係 ——近代留学生交換を中心に——

ガザンジェ（東洋文庫・日本学術振興会 外国人特別研究員）

近代日本とチベットは「同州、同教、同種」という認識或いは名目で頻繁に接触した。一方、当時、日本仏教界では河口慧海（1866-1945）や寺本婉雅（1872-1940）などチベット仏教の經典や状況を求めて入蔵したのは周知のことである。特に、両地域に大きな影響を与えたのは相互の留学生派遣であり、チベットからはツァワ・ティトゥル（1879-1959）ら3人と日本からは多田等観（1890-1967）と青木文教（1886-1956）がチベットに派遣され、彼らが帰国後にチベット仏教の研究を行い、後継の育成に努め、数多くの研究成果を輩出して日本のチベット研究の基礎が作られた。

当時、チベットにとっても、近代日本仏教界はどのような意味を持っていたのか、当時、五台山で13世ダライ・ラマがどのような目的で日本本願寺と関係を結んだのかは、近代日本仏教界とチベットの関係の上で重要な点である。さらに日本の留学生青木文教、多田等観などがチベットで重視され、13世ダライ・ラマ（1876-1933）と9世パンチェン・ラマ（1883-1937）の高配を賜って多くの貴重なチベット語文献が日本にもたらされたこと、さらには戦後の日本でチベット学が発達したことなどに深くつながっていると考えられる。

本発表で13世ダライ・ラマと東本願寺の大谷光瑩（1852-1923）、西本願寺の大谷光瑞（1876-1948）、多田等観との手紙や寺本婉雅、青木文教、多田等観などの旅行記に記述されているダライ・ラマと日本仏教界が接触したことを記す資料に基づき、当時、両地域の相互の留学生派遣の目的を明らかにし、その留学交換で両地域における影響などを論じたい。

1950年10月の昌都戦役開戦理由の再検討 ——作戦の立案過程に着目して——

金牧功大（慶應義塾大学法学研究科）

本報告の目的は、近年利用可能となった資料群に基づき、中華人民共和国の建国直後、チベット「解放」の嚆矢と目される昌都戦役の開戦理由に関する従来の主張に修正を加えることにある。昌都戦役（チャムドの戦い）とは、1950年10月に東チベットの要衝である昌都において生じた人民解放軍とチベット側の軍隊間の初めての軍事衝突である。本報告は、この戦役にかかる作戦立案と進軍過程の再検討を通じて、以下の点を主張するであろう。第一に、建国当時、毛沢東をはじめとした中国共産党指導者たちは1950年内に全チベットを「解放」しようと企図しており、この時点において昌都はあくまでラサに向けた進軍経路上に位置する単なる一通過点としてしか認識されていなかった。第二に、1950年内にチベット全体を占領するという計画が達成不可能となるや、中国共産党は同年内に昌都のみを占領するという計画へと変更した。つまり、本報告は昌都戦役を「妥協の産物」であったと主張するであろう。この「妥協の産物説」に立てば、グルンフェルド [A. Tom. Grunfeld] が唱えるチベット側の交渉のための代表たちが期日までに北京に来なかったため人民解放軍が昌都に対する攻撃命令をうけたのだという「懲罰説」や、ゴールドスタイン [Melvyn C. Goldstein] が主張する中国側にはそもそも最初から全チベットを侵略するという意図はなく、交渉を有利に進めるためラサを揺さぶるべ

く昌都を攻撃したのだという「心理戦説」は修正されなければならない。

13 世紀のチベット人学者達による刹那滅論証方法の理解

崔境眞（東京大学特任研究員）

12 世紀後半以降、カダム派サンブ僧院系やサキャ派の学者達は、学術的交流によって相互の仏教論理学思想を深めていた。Hugon [2004] や西沢 [2007] などの先行研究が指摘しているように、カダム派のツェンナクパ（12 世紀）や、ツルトウン（ca. 1150–1210）、そしてサキャ派のサキャパンディタ（1182–1251）の論理学書に思想的な相互関連が見られる。本発表では、刹那滅論証方法に関しても、13 世紀に活動していたカダム派やサキャ派の学者達が学派を超えて影響し合っていたことを取り上げる。

申請者は以前に、カダム派のチョムデンレルティ（1227–1305）が刹那滅論証方法に関する解釈に関して、それまでのカダム派の学者達とは違う新たな観点を示していると指摘した。彼以前には「不依存の証因」と「拒斥証因」の関係について、一方がもう一方の付随的な論証となるという、両者を従属関係で理解する傾向が一般的であったが、チョムデンレルティの『論理学莊嚴華』には、それぞれが異なる働きをするという、両者を並列関係で考える解釈が見られ、その後は後者の解釈が主流となっていった。その点に注目して申請者はチョムデンレルティの思想的な独創性を主張したが、本発表では、ツルトウンから始まり、サキャパンディタ、ウユクパ（1170–1253）、そしてチョムデンレルティにつながる脱学派的な師弟関係がその独創的な思想の背景として考えられることを示したい。そのために、前の三者の刹那滅論証方法に関する理解を分析し、それらがチョムデンレルティの思想に及ぼした影響を考える。

ガワンタシによる「輪廻」(‘khor ba) の解釈

矢ノ下智也（広島大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC1）

本発表では、ゲルク派の学僧セー・ガワンタシ（bSe ngag dbang bkra shis: 1678–1738）による『縁起大論』（*rTen ’brel chen mo*）の問答を分析し、「輪廻」(‘khor ba) という概念を彼がどのように理解していたのかを明らかにする。

インド仏教において、菩薩やブッダの化身が一切衆生を輪廻の苦しみから救うために再生することはよく知られている。さらに、チベット仏教に目を向けると、ダライ・ラマやパンチェン・ラマの後継者を選出する転生相續制度がある。この制度は、ダライ・ラマが一切衆生を輪廻の苦しみから救済するために、観音菩薩の化身としてこの世に出現するという考えに基づいて成り立っている（石濱 2010: 384ff.; 吉水 2016: 151）。この考えの背景には、インド仏教以来の輪廻思想があるとされている（吉水 2016: 151）。また、いくつかの先行研究では、菩薩の再生と輪廻を同一視する解釈もなされてきた（江島 1992: 127; 船山 2020: 120）。しかし、もし菩薩やブッダの化身が再生することを輪廻として理解するならば、輪廻した菩薩がその同じ輪廻の苦しみの中にいる衆生を救うということになってしまう。この点について、ガワンタシの解釈は注目し値する。ガワンタシは『縁起大論』において、ツォンカパによる「解脱を追求する者は来世での身体を獲得しようとするが、その

身体は輪廻に含まれない」という解釈に立脚し、ある特定の条件下で業を積み、その結果として人間に再生したとしても、それは「輪廻」(‘khor ba) ではないという解釈を提示する。ガワンタシの解釈が示唆するのは、インド仏教では積極的に論じられてこなかった「輪廻」(‘khor ba) と「再生」(yang srid) という概念の相違であると考えられる。

ツォンカパ著『如意牛』における *saṃvara*

青原彰子（広島大学総合科学研究科）

ツォンカパ(Tsong kha pa)著『如意牛』(‘Dod pa ’jo ba)はルーイパ (Lūipa)著『チャクラサンヴァラ現観』(*Cakrasaṃvarābhisamaya*)の詳細な註釈である。本発表は『如意牛』に説かれる *saṃvara* の語義解釈を考察する。*saṃvara* はもともと「戒」「律儀」といった意味であるが、Tsuda 1974 は *saṃvara* のチベット訳として、*bde mchog* と *sdom pa* があることを指摘し、杉木 2003 は *saṃvara* の意味に「最高の楽」(*paraṃ sukham*)と *saṃ-vr* を語幹とする「覆い隠すこと、秘すること、守ること」の2種の意味を持つことを説いている。ツォンカパは特に *bde mchog* と *sdom pa* を意味に応じて使いわけをしていないようである。本研究はツォンカパが *saṃvara* (*bde mchog* 及び *sdom pa*) を「一切仏の身口意3つの秘密の事業を1つにまとめたもの」と説明し、詳細には、楽空無差別の俱生の大楽と身口意の3つをまとめた *Heruka* の姿の2つとし、その2つが道と果それぞれにあると説明している。道と果は般若学の三智である基道果の後の2つである。ツォンカパはサンヴァラの成就法すべてを、顕密を包括して、*saṃvara* (*bde mchog*, *sdom pa*)にまとめようとしている。

ツォンカパの空思想における再現性

野村正次郎（文殊師利大乘仏教会）

ツォンカパの空思想は、一切の現象に関する真理の記述であり、歴史的解釈を模倣し、知の再現と複製により観察者を質的な向上を図りながら排列していく企画である。この企画の最大の関心事は、道位から利他色身を伴う果位法身への移行にあり、その実現時に精神は、物理現象 (*gzugs phra mo*) にも積極的に関与することが可能であり、精神と物質の不可分な総体 (*dbyer med ro gcig pa*) を創出すると同時に、空間・時間に限定されない一切衆生への社会的関与 (*‘phrin las*) が可能な状態を実現する。このツォンカパの関心は今日もチベットの伝統的学問へ継承されており、特定の観察者への転嫁を解消した非限定的な再現性 (*reproducibility*) や複製可能性 (*replicability*) を担保し、検証耐性を有する知識の集積を目指すその基本姿勢は、現代の科学的態度と異なるものではない。しかし残念ながら、このツォンカパの空思想に由来する学問を、現代科学の細分化した文脈とは隔絶したものとして扱ってしまい、両者の間に不必要な過度な分断を想定しそれを強調する者も少なくはない。本発表では、こうした現況に鑑み、ツォンカパの空思想を構成する言語観・歴史観・認識論・世界観から、知の再現性の担保の方法論を総合的に検討し、知識 (*scientia*) の複製原理とその普遍的意義について考察したい。